



II

官兵衛は父職隆(しやくりゅう)同様に教え44歳で家督を譲り、嫡男の長政への実戦教育に力を入れる。

九州攻めの日向(ひゅうが)耳川(みみかわ)の戦いで長政が陣頭(じんづう)に立ち、小人数で島津の大軍を撃退した。これを後方の山の上から眺めていた官兵衛は、家臣が本日の勝利は長政様の大手柄(おんてい)であると報告したとき、「汝(なんぢ)らは軍法を知らないからそのように思うのだ」と言い、次のように諭した。「大将は兵をよく指揮するのが役目である。葉武者(はむしや)のように自分一人の働きを好むのは大将の自覚不足である」。長政はあまりにも勇気があり過ぎ、敵に相対するといつも先駆けをしようとする

教育にかける思い

長政、家臣への深い愛情

このように諭し、勝ち戦の中でも反省点を見出し次の戦いの糧とした。

九州攻めの後、領地を与えられた豊前(ぶんぜん)で土豪(たうこう)の宇都宮(うつみや)鎮房(ちんぼう)が反乱を起し、城井(じやい)谷(や)城(じやう)に立て

こもったとき、長政は官兵衛の許可なく城井谷(じやい)の居城(きじやう)近くまで攻め上った。長政は逃げる敵を山中深く追いかけたが、帰り道で敵の猛攻撃を受け命からがら逃げ帰った。官兵衛はこれを聞

き、「今日の敗北は若い者が敵

を深追いしたためである。逃げていく弱い敵には用心して初めの勝ちで戦いをやめるのがよい」と戒めた。これは官兵衛の戦術の基本であった。

先を見通す官兵衛は戦国の世が終わり世の中が安定すると、

今後は浪費が国を滅ぼす元になると考えた。官兵衛は常に節約

を心掛け、無駄な出費をとても嫌い出費も惜しんだが、人に施すときは少しも惜しまなかつた。必要な時に財を惜しまず使

うには日ごろから節約し、財を蓄えておかなければならないと考えるのである。このような教

えは福岡藩(ふくおか)で受け継がれ、家臣は身分に応じた人馬(ひとば)武具(ぶぐ)をそろえ、いつでも出陣(しゅん)できる準備を整えていたという。

官兵衛は晩年、長政に心得るべきことをハケ条(はけじょう)の覚書(かくしょ)に遺した。臨終(りんじゆう)の際には長政と重臣(じゆうしん)の栗山(くりやま)利安(りあん)を枕元(まくらもと)に呼び、妻(つま)光姫(みつひめ)の父(ちち)櫛橋(くしはし)伊定(いじやう)から贈られた愛用(あいよう)の合子形兜(ごうしがたかぶと)を利安に与えた。今後は利安を親(おや)と心得、利安の諫言(かんげん)に耳(みみ)を傾けるよう長政に言い渡したといわれる。

このように官兵衛はどの戦国武将よりも教育を重視し、幕末まで続く福岡藩(ふくおか)の基礎(きそ)を築く。

三代藩主(さんだい)光之(みつひかり)は黒田家(くろだ)の公式(こうし)歴史書(れきし)「黒田家譜(くろだ)家譜(かふ)」を編纂(へんさん)させ、九代藩主(くだい)斉隆(なりたか)は藩校(はんがう)として修猷(しゆい)館(かん)、甘棠(かんたう)館(かん)の2校(にがう)を設立(りゅうせつ)した。明治(めいし)以降(いこう)も黒田家(くろだ)は東京(とうきょう)に黒田小学校(くろだ)小(しょう)学校(がく)を設立(りゅうせつ)し、黒田奨学会(くろだ)奨(しょう)学会(がく)は現在(げんざい)も活動を続け、教育重視(きようじゆうし)の精神(しんせいん)を受け継いでいる。

(播磨(はりま)の黒田(くろだ)武士(ぶし)頭(かぶ)彰(あきら)会(かい)理事(りじ)今藤(いまふじ)久(ひさ)夫(と)夫(と))

官兵衛は晩年、長政に心得るべきことをハケ条の覚書に遺した。臨終の際には長政と重臣の栗山利安を枕元に呼び、妻光姫の父櫛橋伊定から贈られた愛用の合子形兜を利安に与えた。今後は利安を親と心得、利安の諫言に耳を傾けるよう長政に言い渡したといわれる。

このように官兵衛はどの戦国武将よりも教育を重視し、幕末まで続く福岡藩の基礎を築く。

三代藩主光之は黒田家の公式歴史書「黒田家譜」を編纂させ、九代藩主斉隆は藩校として修猷館、甘棠館の2校を設立した。明治以降も黒田家は東京に黒田小学校、福岡に黒田奨学会を設立し、黒田奨学会は現在も活動を続け、教育重視の精神を受け継いでいる。

(播磨の黒田武士頭彰会理事今藤久夫)

次回(きんかい)は11月(じゅういち)7日(にち)付(つ)で掲載(こうがい)予定です。



銀白檀塗合子形兜 (もりおか歴史文化館所蔵)



「黒田家譜」貞享本(写)と宝永本(写) 一播州黒田武士の館所蔵